



伝えて行くのは
日本人の
祈りのところ。

シリーズ

一期一会

～素敵なお顔に会いたい～



能楽シテ方 喜多流 能楽師

● 大島 衣恵 さん kinue ōshima ●

文・写真=ハッピーワン編集部

● profile ●

大島 衣恵さん

おおしま きぬえ

広島県在住。社団法人能楽協会会員。福山市の喜多流大島能楽堂を拠点に活動。比治山大学客員教授。エリザベト音楽大学、広島大学などで、能楽非常勤講師を務め、国内はもとより、海外での公演や能楽指導などを行う。

まつすぐな眼差しに引き締まった口元。ゆつくりとした動きながら、全身から漂う凜とした空気に、思わず背筋が伸びるようです。

二歳から能を始めたという大島衣恵さんは、能の一派、喜多流^{きたりゅう}で初めて誕生した女性能楽師。シテ方と呼ばれる「舞^{まい}と謡^{うたひ}」の演じ手として活躍中です。

室町時代に生まれ、武士や町人によって育まれてきた日本の伝統文化である能楽。その中で、簡素で雄大な舞と、力強い謡を特徴とする喜多流の血統を引き継ぐ大島さん。

能に寄せる思いと、今後の活動への意気込みなどを伺います。

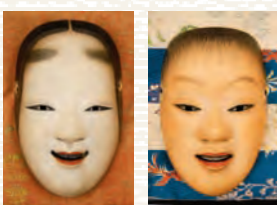


舞を披露して下さる大島さん。舞台上上がると表情が一変し、キリリとした強い眼差しに圧倒されそうになります。

抑制の効いた静かな動きの中にも溢れる、力強さと存在感。



定期公演でシテ方を演じる大島さん（2002年3月）



人間の喜怒哀楽を表現すると言われる能面

喜多流 大島能楽堂



年に4、5回の定期公演の他、能楽堂見学、体験学習、企業やサークルの研修会、芸術鑑賞会など、地域の文化振興の拠点として幅広く活用されています。

〒720-0814 広島県福山市光南町2-2-2
Tel.084-923-2633 Fax.084-923-8730
URL <http://www.noh-oshima.com>

パソコンで調べる時は 喜多流大島能楽堂

それにしても「なぜ能を続けよう」と尋ねますと「とにかく好きなのです。稽古も、舞台に出るのも大好きです。喜多流の家に生まれ、祖父や父が苦労する姿を見ていましたから、大変だとはわかっていました。しかも私は女性です。でも母が、同じ女性として応援してくれたのです。」

そんな大島さんに、能の魅力を伺いますと「能独特の雰囲気です。能は演劇と違い、面をかけます。面をかける、小さな穴から舞台の一部しか見えませんが、観客からは観られますが、自分には周囲が見えない。その不安感に勝つために、集中力を高め、自分の弱い心と対峙しながら演じます。役者の精神的な葛藤が、凛とした雰囲気を作り出すのです」と、言葉に熱が入ります。

海外公演などにも積極的に取り組み、高い評価を得る大島さん。「伝統文化の茶道や華道、能などは祈りの儀式が始まりで、人々の祈りが形として伝えられたものです。能や茶道に親しみながら、そこに込められた日本人の祈りの心を、今後も伝えたいと思います。」日本の祈りの心を世界へ、そして未来に。大島さんの挑戦は続きます。



楚々とした立ち居振る舞いで、和服を美しく着こなす大島さん。落ち着いた話し振りの中にも、柔らかな笑顔が印象的。



現在、能楽師である父親の政允氏や兄弟と共に、舞台活動や能の普及啓蒙活動に取り組む大島さん。「今はこうして大好きな能に携わっていますが、苦しい時期もありました」と語られます。喜多流の稽古は体にたたき込むのが基本。厳しさに耐え、四人兄弟の長女として精進の日々が続いたそうですが、男性的な芸風が特徴の喜多流は女性の

シテ方を認めず、修行の継続に大きなハードルが立ちふさがりました。「小学生迄は男女とも子方(子役)として舞台上がれますが、中学生になると女性は上がりません。しかも、次のステップへ進む修行のプログラムも、弟にしか準備されていませんでした。喜多流でプロになるには内弟子修業が必要ですが、私はそれも叶いませんでした」。

大好きな能で、男女差を痛感した中学・高校時代。その後、能を続ける道を模索して進んだ大学で、ほかの流派の女性能楽師と出会い、壁を乗り越える強い気持ちを持つてたといいます。その後、流派から「父親の元でなら」という条件つきで活動を認められた大島さん。持ち前の忍耐力で活躍の場を徐々に広げていきました。



◀ 金地に御所車の仕舞扇。工芸品のような輝きを放つ扇は、舞台には欠かせない道具。

【能の豆知識】 ●七百年の歴史を持つ能は、観世流など四座一流が知られ、中でも喜多流は、武士のたしなみとして多くの大名に奨励されてきた流派です。●能の役者にはシテ方(主役)、ワキ方、狂言方、囃子方などがあり、大島家はシテ方の流派です。